

想うがままに

共助の思想が勝った

本誌編集委員 小寺山康雄

昨年一月一日、全国二千人から寄せられたカンパ一億五〇〇万円を航空局に叩きつけることによって、成田空港管制塔闘争元被告は二七年に及ぶ国家の鉄鎖からついに解放された。このことは市民運動情報紙『ACT』二五一号のコラムに書いたのだが、ここでは別の角度からこの快挙を捉え直してみたい。

管制塔闘争は二度勝利した

三里塚闘争は双方に多くの死傷者を出した「実力闘争」だったし、七八年三月二六日の管制塔占拠破壊闘争も政府

権力に対する「政治決戦」の重要な環として闘われた。三里塚の現地には一度しか行かず、「政治決戦」の呼号に少なからぬ違和感を抱いていた多くのうなものでも、真っ青な空の下、管制塔に翻る真紅の旗をテレビで見、名状し難い感動に身を震わせたことを昨日のこのように鮮明に憶えている。

農民が営々と耕し稔らせてきた豊穡の大地を国策の名の下、一片の布告によって強奪する国家の暴力。その暴力性を暴き、農民と農民の抵抗に連帯する者に対する国家の威信をかけた仮借ない弾圧。

管制塔闘争は多少の僥倖に恵まれたとはいえ、周到な準備もあって、権力側に一人の死傷者も出すことなく勝利した見事な闘いであった。直接物理的に破壊したのは航空管制システムコンピュータであったが、国策遂行の象徴たるコンピュータを破壊することによって、国家の暴力装置に対する物理的打撃に数万倍する打撃を国家の威信に下し、それを粉々にした。

国益のため野放しにされてきた公害に苦しみ、国策の原発に脅え、「公共事業」によって田畑と住居を奪われ、住み慣れた地域を追われてきた多くの人

びとは、国家の威信失墜に喝采した。この闘争を機に、ヘゲモニーは三里塚農民とそれに連帯支援する側に移ったのである。それゆえ政府は闘争の収束を図るためとはいえ、九〇年代に入って「ボタンの掛け違い」を認め、二期工区の強制収用断念を表明するなどの妥協を強いられた。

とはいえ、威信を碎かれた国家は報復した。管制塔闘争の担い手に対して、最短六年、最長一二年の刑を課したばかりか、出獄後も就職を妨害し、何かにつけて生活を脅かした。そして時効寸前になって管制塔破壊の損害賠償を強制執行する挙に出た。元金四千万円、利子六千万円を支払えというのだ。

一六人の若者もいまや中年、運動から離れてしまった人もいる。月給の四分の一を差し押さえられ、生活のめどが立たなくなった人もいる。国家に抗う者に対する見せしめはか

くも執拗かつ残忍だった。イラクで拉致された日本人の救出に対して「自己責任」論がどこからか噴出し、マスコミの一部がさらにそれを煽った。耐震偽装問題でも同様のことが起こっている。この論理は、国家の責任は一切問わないのである。おぞましい国になったものだが、今となっての損害賠償強制執行はそうしておぞましさに乗っかり、増幅させることを企図したものである。

だが、カンパは呼びかけを発してわずか三カ月で一億一千万円を超えた。国家のもくろみをまたしても叩き潰したのだ。管制塔闘争は二度勝利したのである。ある元被告は語る。「何度も何度も挫けそうになったが、生きていてよかった。いい人生だった」と。そのように語ることでできる彼らの人生は、まことに美しい。

管制塔にはかけ登らなかったが、別の現場で三・二六闘争を闘った「準当

事者」の佐々木希一は今回の快挙について、「人びとは何に共感したのか」（第四インター日本支部再建準備グループニュースレター『インターナショナル』〇五年一月号所収）と問いかけ、示唆に富む総括をしている。概略を紹介する。

「準当事者」からの提起

佐々木は個人的推測と断つたうえで、今回のカンパ総額の半分は三・二六闘争にかかわった人間が集めただろうが、残りの半分はさまざまな社会運動の担い手たちの拠金ではなかったかと推測する。この人たちは小泉的改革が煽った「個人主義」や「自己責任」に代表される人間関係の荒廃に抗して、「連帯と互助」の精神の復権をカンパ活動に見出し共感したのではないか。だとすれば、三・二六闘争を「権力闘争」として闘った佐々木らと、この人たちの共感との間にはギャップがあ

り、このギャップを越えねば次代を開く共働へと発展することができないのではないかと、佐々木は自問する。

①「権力闘争としての三・二六闘争」は廃港どころか自民党福田内閣の打倒さえ達成できなかったことで敗北した。また農民の抵抗闘争に対する全国的な共感を、「政治権力の転覆だけが社会を変える」というドグマに囚われていた自分たちの主観的願望と取り違えてしまった。今回のカンパ活動の成功も「権力闘争」への共感と取り違えてはならない。

② 三里塚農民の闘いが「自然と共生」「生命の循環」という「農的価値」を掲げた持久戦に転じ、有機農業や産直運動という社会的運動Ⅱ「実験村」運動を開始してからも、その先進的意義についてほとんど関心を示さなかった。

ロシア革命の機動戦に呪縛されていた自分たちは、グラムシの知的・道徳的ヘゲモニーの陣地戦的展開を農民の

新しい運動の中に見出すことができなかった。

③ 九九年一月、シアトルの反WTO運動に端を発する反グローバルズ運動Ⅱ「もうひとつの世界は可能だ」運動の中に、三里塚の実験村運動を位置づけし直すべきである。

④ 今回のカンパ活動の成功は政治闘争の勝利というよりも、地道だが頑強な社会変革運動の大衆的基盤創出の運動として捉え直さねばならない。それはまた新自由主義的世界観・社会イメージ・人間関係論に抗する新しい価値観創造の闘いでもあるから、文化運動とさえ呼べる闘いである。——以上が佐々木の問題提起的総括である。

いささかの宣伝

以上の紹介でわかるように、佐々木らは最近グラムシを熱心に研究している。いうまでもなくグラムシ研究はグラムシ派が独占すべきものでないし、

独占できるものではない。さまざまの思想によって縦横無尽に研究されてこそ、グラムシ思想は豊かになり、現代に甦る。

あわせて佐々木らは戦後左翼運動の総括を試みている。我々はなぜ敗北したのかを探求することは、佐々木言うように次代に継承し、次代を切り開くうえで不可欠不可避のことである。そしてその作業はひとつの時代を形成した新左翼の協働の仕事としてなされるべきであり、本誌はそのためのひとつの試みとして、構造改革派の総括をなすべき使命があることをほくは三号で指摘した。

佐々木らのグループは、最近、寺岡衛著・江藤正修編『戦後左翼はなぜ解体したか——変革主体への展望を探る』（同時代社）を刊行した。それにあわせて『証言と資料』がまもなく刊行されるが、ぼくは構造改革派の一員として、「証言」している。乞うご購読を。